

和歌山ろうさい病院広報誌

## わろうて

わかやまろうさい病院からのおてがみ

謹賀新年

和歌山ろうさい病院

病院長 南條 輝志男



平成30年・戊戌(つちのえ・いぬ)の年頭にあたり、謹んで初春のお慶びを申し上げます。皆様におかれましては、佳き新春をお迎えのことと存じます。

昨年は皆様におかれましては如何な1年でしたでしょうか？

国内では、秋篠宮眞子様のご婚約や天才中学生将棋士・藤井聡太四段の29連勝、日本人アスリートたちの国際舞台での大活躍などで、いっばいの元気をいただきました。一方、国際的には北朝鮮の核・ミサイル開発問題をはじめ、トランプ政権の予期できない国際対応、世界に拡散しつつある従軍慰安婦少女像問題等々、不安定かつ危機的な政情に陥っているにも関わらず、マスコミ(ワイドショー)では連日のようにモリ・カケ(忖度)問題、希望の党(排除)、そして政界や芸能界での不倫花盛り報道、そして年末には横綱暴力問題等を優先的(??)に取り上げ、連日興味本位の話題に事欠かない一年間でもありました。

和歌山ろうさい病院では、地域住民の皆様方のご支援のお蔭様をもちまして、健全な病院運営がなされています。昨年7月1日には、国保日高総合病院から若崎久生先生が健診部長(内科第二部長)として、和歌山県立医科大学消化器内科から玉井秀幸先生が肝臓内科(新設)部長として赴任され、内科系診療レベルは飛躍的に充実しました。9月1日には米国イリノイ州シカゴのRush University Medical Center留学から岡田秀雄脳神経外科第二部長が無事帰任され、脳血管内治療の患者様が急増しています。10月21日には辰田仁美第二呼吸器内科部長のご尽力により第15回女性医療フォーラム「知力が超高齢社会を支える」を和歌山県JAビルにて盛会裏に終えることができました。11月19日には、医大病院とのドクターヘリによる患者搬送離着陸訓練を無事行うことができ(写真参照)、来年度からは災害医療研修棟屋上のヘリポートをより有効活用できるよう近隣住民の皆様方のご理解を深めていただくため、本年3月11日東日本大震災の日にドクターヘリを使った災害訓練を再度行う予定です。近隣の皆様には是非、ドクターヘリの見学のためご来院いただきたく存じます。

本年も更に実力派の医師確保に努力し、地域の皆様にとりまして、「個性輝く、魅力溢れる病院」であり続けられるよう精進いたしますので、昨年同様変わらぬご指導・ご支援を宜しくお願い申し上げます。

本年が皆様にとりまして、ご多幸の年となりますよう心より祈念申し上げます。



写真：当院災害医療研修棟屋上のヘリポートに着陸した和医大のドクターヘリ(11月19日)



日本医療機能評価機構認定病院  
地域医療支援病院

独立行政法人労働者健康安全機構

和歌山ろうさい病院

〒640-8505 和歌山県和歌山市木ノ本93番1

TEL.073-451-3181(代) FAX.073-452-7171(代)・073-451-3788(地域連携室専用FAX)

E-mail:soumu@wakayamah.johas.go.jp URL:http://www.wakayama.johas.go.jp

和歌山労災病院理念

地域の人々と勤労者に、地域医療機関と密接に連携しつつ、安全に十分配慮した最適な医療を提供する。

# 和歌山県ナース章受賞

## 看護副部長 杭ノ瀬 結子

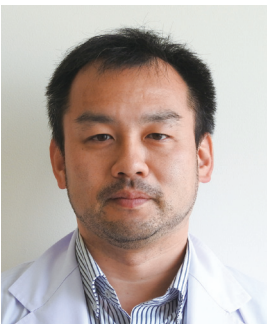


栄えある、和歌山県ナース章を賜わり、大変光栄に存じます。  
ひとえに今まで歩むべき道に灯をかざし、導いてくださ  
いました病院関係各位に深く感謝申し上げます。

35年間の勤務の中で、看護の素晴らしさや、やり甲斐を感じ、ある時は人としての尊厳や倫理的側面について考え、それらを実践する多くの機会に恵まれました。

今後も、戴いた章に恥じることなく、患者様には安らぎと満足につながる看護の提供に努め、専門性の高い心豊かな後進の育成、並びに病院を核とした地域の皆様と共に一人ひとりの患者様に最適・最良の看護が提供できるように邁進していきたいと存じます。

# 脳血管内治療について



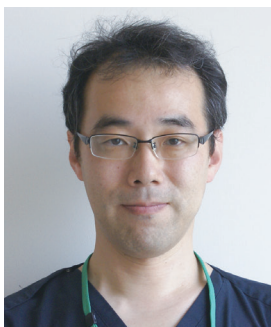
脳神経血管内治療  
センター長  
岡田 秀雄 先生

平成19年4月に赴任し早10年余りが過ぎました、脳神経外科の岡田秀雄です。脳外科臨床に没入する日々の中、一度は海外留学を経験したいという思いが募り、平成28年9月より1年間、留学させていただきました。留学先は米国イリノイ州シカゴのRush University Medical Centerで、研究員として脳血管内治療の見学と、研究活動に勤しむ毎日を送りました。

脳血管内治療は脳神経外科の一分野ですが、“切らずに治す”手術として近年大きな発展を遂げています。同大学には、この分野で世界的に活躍しているDemetrius Lopes教授が居り、多くの症例を見学し、研究をともにすることができました。日本と米国で治療の技術に大きな差はないと感じる一方、治療器具の臨床応用や開発に関しては、米国がまだ1歩も2歩も進んでいます。国内では未導入あるいは導入間もない治療器具に実際に触れ、一流の術者と意見交換できたことは、とても有意義な経験でした。難治性脳動脈瘤を整流効果で治療させる頭蓋内ステント治療の見学、脳動静脈奇形治療の新しいバルーンの開発と治療技法の検証など、日本ではできない多くの経験を得ることができました。

脳血管内治療の最近のトピックスは急性期脳梗塞治療の進歩で、重症脳梗塞でも発症から6時間以内に治療すれば半数近くが回復できるようになっています。救急医療システムの維持が必要で、われわれは救急隊から直接連絡を受けるホットラインをもち、より多くの患者様を少しでも早く治療できるよう、24時間体制で取り組んでいます。日米には医療システムの違いや規制の壁など多くの違いがありますが、世界の標準治療を地域で実現しつづけることが私の理想であり、シカゴに住み最先端の病院に通う人たちにも負けない医療を地元和歌山で提供することができるよう、これからも取り組んでいきたいと思っています。

# ドクターヘリ患者搬送訓練について



救急科部長  
中村 俊介 先生

昨年の11月19日、災害医療研修棟の屋上ヘリポートにおいて、ドクターヘリの離発着訓練を行いました。「和歌山ろうさい病院に救急搬送された患者様に緊急手術が必要であるため、和歌山県立医科大学病院へ転院する」という想定の実機訓練であり、大学病院救急部の協力によって、県内で運行しているドクターヘリの実機を用いて実施しました。

今回の訓練では、まず和歌山ろうさい病院の救急外来から大学病院に連絡、転院を相談した後にドクターヘリ搭乗医師への情報提供を行っています。その後、実際にドクターヘリが到着するまでの時間は短く、フライト時間が10分を切ることを聴き、改めてヘリコプター搬送の高い利便性に気付かされました。

ヘリコプターの騒音や風害を危惧していたため、病院の内外、近隣での騒音について測定を行いました。結果は問題にならない程度であり、さらに風害も見られませんでした。

今回の訓練については、地域の代表として自治会長にも視察いただきました。特に大きな問題のないことを確認いただき、さらに地域住民の皆様方に理解を得ることができました。

これまで災害医療研修棟のヘリポートは、災害時においてのみ使用することを予定していましたが、緊急搬送を要するような事例ではドクターヘリを利用することで迅速かつ安全な対応が可能となるため、今後は提供する救急医療が充実すると考えています。

7年前に東日本大震災が発生した3月11日、地域の皆様にも参加いただき、防災訓練を行うことを予定しています。

その際、ドクターヘリを使用した訓練を実施する予定です。皆様にヘリコプターの離発着を見学いただき、ドクターヘリを利用した救急医療にご理解いただければと考えております。是非、見学にいらっしゃって下さい。



## 平成 29 年 10 月の新任医師紹介



ありた ゆう  
有田 祐 先生

循環器内科

6年半ぶりにろうさい病院で勤務させていただくことになりました。少しでも患者様、病院のお役に立てるよう頑張ります。



はら たくや  
原 拓也 先生

初期臨床研修医

はじめまして。地域の皆様にご貢献出来るよう、頑張ります。

# かかりつけ医のご紹介

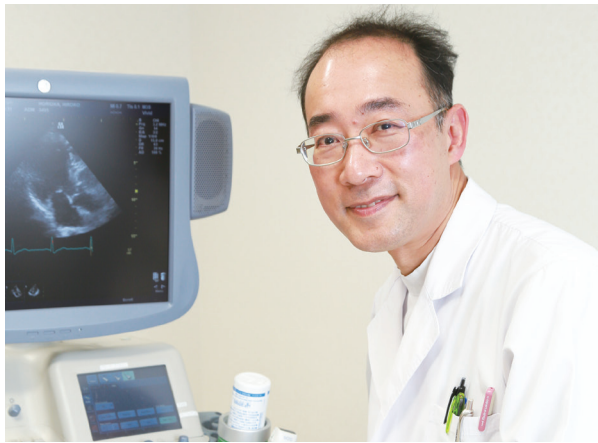
和歌山ろうさい病院との「病診連携システム」に参加されている「かかりつけ医」の先生方をシリーズでご紹介しています。

## はんだ内科クリニック

診療科目 内科 循環器内科 消化器内科

住所 〒640-8435 和歌山県和歌山市古屋57-2

電話 073-460-7961



はんだ さとし  
半田 暁司 院長



はんだ ゆきこ  
半田 有紀子 先生

半田 暁司先生は、平成 20 年 12 月に和歌山市古屋に、『はんだ内科クリニック』を開院されました。

建物は、全面バリアフリーで車いすでも安心です。

和歌山ろうさい病院から一番近いクリニックです。

半田 暁司先生は、日本循環器学会専門医で、高血圧、心臓病や血管の病気のエキスパートとして地域医療に貢献されており、丁寧かつわかりやすい説明を心懸けていらっしゃいます。

また、半田 有紀子先生は、日本消化器内視鏡学会内視鏡専門医に認定されており、内視鏡のエキスパートとしてご活躍です。女性医師が胃カメラや大腸カメラを行っていますので、女性の方も検査を受けやすいのではないのでしょうか。

和歌山ろうさい病院が今後も地域医療を提供し続ける上で欠かすことのできない重要な連携協力医（パートナー）のおふたりです。

